アメリカン・モダニストを支配する＜速度＞の文化的波及効果に関する探究

秋山　義典

この研究は、アメリカン・モダニスト作家による＜速度＞言説の文化的波及効果についての探究を行っている。まず、ヨーロッパでの＜速度＞言説について触れられており、速度や機械化、近代化が重要視されるようになった背景を説明した。この＜速度＞言説は、未来派やキュビズムなどの芸術運動にも影響を与えている。

＜速度＞言説は、社会や文化において速度や加速が重視され、賞賛される点を示した。産業革命や都市化、交通や通信の発達などがこの速度言説を生み出した。特に 20 世紀初頭のヨーロッパでは、第一次世界大戦やロシア革命などの政治的・社会的な変動が起こり、人々に＜速度＞の感覚を強く与えた。これらの変化は、モダニズムの作家や芸術家にも大きな影響を与え、彼らは自分たちの作品に＜速度＞を取り入れて表現や形式を刷新しようとした。

この研究の後半では、速度言説の背景として産業革命や都市化、交通や通信の発達が紹介される。これらの現象は、人々の時間感覚や空間感覚を変化させた。また、1929 年の「大恐慌」が社会に与えた影響とそれに伴う速度の変化についても考察した。この時期は経済的・政治的に不安定な時代であり、＜速度＞言説に対する反動や批判も現れた。

さらに、F. Scott Fitzgerald の小説 *The Great Gatsby*（1925）と Ernest Hemingway の小説 *The Sun Also Rises*（1926）における＜速度＞言説の表現についても取り上げた。*The Great Gatsby* では、移動手段としての鉄道や自動車が重要な役割を果たし、速度による危険や悲劇も示されている。*The Sun Also Rises* では、物理的な速度と感情的な速度の両方が登場人物の行動や感情に影響を与えている。

アメリカのモダニズム作家の文脈では、ヨーロッパで生まれた＜速度＞の言説が文化的に大きな影響を及ぼしていた。この言説は、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてヨーロッパで生まれ、文化的・社会的文脈の中で速度、機械化、近代化といったテーマを強調した。この言説はヨーロッパの美術や文学に影響を与え、未来派やキュビズムなど、速度や動きを表現する新しい技法を模索する芸術運動の発展につながった。

＜速度＞の言説は、社会や文化においてスピードや加速を優先し、産業革命や都市化、交通や通信の発達といった現象の結果として賞賛された。20 世紀初頭のヨーロッパでは、特に第一次世界大戦やロシア革命などの出来事により、政治的・社会的に大きな変革が起こった。これらの出来事は人々の価値観や感性を変容させ、特に戦争や革命は個人の間でスピード感を強めた。戦争では飛行機や戦車などの新兵器が導入され、戦闘の速度が増した。革命は社会や政治に急激な変化をもたらし、速度に伴う興奮、熱狂、不安、恐怖の感情を呼び起こした。こうした変化は、モダニズムの作家やアーティストに影響を与え、表現と形式を若返らせる手段として、＜速度＞　を作品に取り入れるようになった。

例えば、19 世紀後半に導入された時計は、時間を定量化し、生活や仕事のリズムを確立させた。20 世紀に入ると、社会・文化の中で＜速度＞という概念が注目されるようになった。第一次世界大戦では、戦闘機や機関銃などの技術にスピードが活用され、短期間で世界中に壊滅的な影響を与えた。戦争は、人々にスピードの恐怖と魅力の両方を植え付けたのである。

F. Scott Fitzgerald の小説 *The Great Gatsby*（1925）に注目すると、スピードの言説の表現が観察される。この小説では、1920 年代のアメリカ社会が描かれ、列車や自動車といった交通手段が顕著に登場する。電車はニューヨークへの憧れや野心を象徴し、自動車は富や権力、快楽、過剰を象徴している。しかし、これらの交通手段は、スピードがもたらす危険や悲劇を強調するものでもある。例えば、ディジーの無謀な運転による、スピードの出し過ぎでウィルソンの妻が亡くなってしまう。この事件は、スピードのもたらす結果や加速する行為について懸念を抱かせるきっかけとなる。

Ernest Hemingway の小説 *The Sun Also Rises*（1926）では、肉体的・感情的側面を通して＜速度＞の言説を描いている。この物語は、パリからスペインのパンプローナまで旅をする駐在員のグループを描いている。この小説の登場人物は常に移動しており、物理的なスピードを表現している。例えば、ジェイク・バーンズは、闘牛を見るためにパリからパンプローナへ移動する。また、ブレット・アシュレイはパリからパンプローナへ、闘牛を見に行くために移動する。ジェイク・バーンズとビル・ゴートンが、ロバート・コーンからの電報を受け取る場面がある。電報という媒体は、＜速度＞を象徴している。電報は、遠く離れた人と瞬時に連絡することができる技術。しかし、電報は、言葉の数に制限がある。そのため、電報は、簡潔で必要最低限の情報しか伝えない。

ジェイク・バーンズの言葉遣いも、＜速度＞を示している。ジェイク・バーンズは、コーンの電報に対して、「What a lousy telegram!」「There’s no use trying to move Brett and Mike out here and back before the fiesta.」「There’s no need for us to be snooty.」などと言われる。これらの言葉は、ジェイク・バーンズがコーンに対して無関心であることや、彼らの計画に変更を加えることに消極的であることを表している。ジェイク・バー

ンズは、＜速度＞によってもたらされる変化や問題に対処することを避けている。

ジェイク・バーンズとビル・ゴートンが、ロバート・コーンからの電報を受け取る場面に焦点を当てると、電報は、遠く離れた人と瞬時に連絡することができる技術であり、＜速度＞を象徴している。しかし、電報は言葉の数に制限があるため、簡潔で最低限の情報しか伝えることができない。

The Sun Also Rises の登場人物たちは、第一次世界大戦後の幻滅と退屈から逃れる手段としてスピードに注目する。彼らは酒やダンスや闘牛や旅行などの活動を通じて生き生きとした日々を過ごすが、最終的には満足を得ることはない。

次に 1930 年代以降の＜速度＞言説を見てみたい。1929 年の世界恐慌の影響とそれに伴うスピードの変化も重要である。世界恐慌とは、1929 年 10 月にニューヨークで起こった株式市場の暴落をきっかけとする世界的な経済危機のことである。その影響は、アメリカだけでなく、ヨーロッパや日本の社会にも及んでいる。例えば、経済的に困窮した人々が都市から地方に移住し、生活のペースが都市のスピードから地方のスピードへと変化した。政治的には、スローペースな民主主義や自由主義の政治体制に対する不満や不安から、ファシズムやナチズムといった権威主義的な政権が誕生した。文化的には、リアリズムや社会主義リアリズムといった文学・芸術運動が、＜速度＞の言説が生み出す虚構や幻想の物語に対する批判と反動として人気を博した。F・L・アレンの『シンス・イエスタデイ』では、この時代の社会と文化を歴史的に分析し、変化の速さに驚く時代であったと述べている。

F. Scott Fitzgerald の短編小説 *Crazy Sunday*（1932）では、ハリウッドで働く人々の日曜日の様子が描かれている。彼らは平日は忙しく働き、自己を抑えているが、日曜日になると自分らしさや恋愛を求めて輝きをみせる。しかしその時間は限られており、すぐに平日に戻らなければならない。

William Carlos Williams の *Spring and All* (1923)では、20 世紀のアメリカの日常風景のなかで＜速度＞についての考察がある。ウィリアムズは高速機械を例に挙げながら、人々が速度に追いかけられて生命力を失っていると指摘している。

また、William Faulkner の小説 *Sartoris* (1929)では、南部の貴族の没落を描いており、主人公のベイヤード・サートリスはスピードの快感を追い求めて危険な行動をするが、最終的に無謀な運転で死んでしまう。

最後に、スティーヴン・カーンの『時間の文化史』から引用された一節を紹介した。この本は主に 1880 年から第一次世界大戦までの時代におけるヨーロッパとアメリカの時間と空間の経験と概念の変化を分析している。交通や通信の技術革新によって引き起こされたこの変化は、テイラー主義、未来派、新しい科学主義、新しい音楽、映画などの運動と結びついていたと強調した。これらの動きは、速度の興奮を追求することで世界を推進しようとしたが、同時に過去のゆったりとした生活ペースへのノスタルジアも、同時に共存していた。カーンによれば、1920 年代の速度ブームの背後には、ある文化的な矛盾や葛藤が示されており、人々がスピードに魅了される一方で、過去の安定やゆとりを求める心的傾向を人々が持っていた点が示唆されている。

参考文献

Duffy, Enda, *The Speed Handbook*, Duke University Press, 2009.

Kolocotroni , Vassiliki, Olga Taxidou, Editors *The Edinburgh Dictionary of Modernism*. Edinburgh University Press, 2020.

Watson, Jay, *William Faulkner and The Faces of Modernity*, Oxford Univ Press, 2020.

Williams , William Carlos and Cecelia Tichi, “Twentieth Century Limited: William Carlos Williams’ Poetics of High-Speed America Author(s).” *William Carlos Williams Review*, Vol. 9, No. 1/2, Centennial Issue (Fall 1983), Penn State University Press, Fall 1983, pp. 49-73.

石原 剛 編 『空とアメリカ文学』 彩流社、2019 年

F・L アレン『シンス・イエスタデイ』 筑摩書房 1998 年

スティーヴン・カーン 『時間の文化史』 法政大学出版局、1993 年

西本郁子 『時間意識の近代』 法政大学出版局、 2006 年

藤野功一 編 『アメリカン・モダニズムと大衆文学』 金星堂、2019 年

ポール・ヴィリリオ 『速度と政治』 平凡社 2001